金沢に生きる家。
金沢で生きる伝統。

ひとを想い、ハレを彩る。

四季折々の情景を、繊細にあらわしてきた加賀友禅。金沢で四〇〇年にわたって受け継がれてきたこの友禅を工房で一貫生産する毎田染画工芸。その三代目である毎田仁嗣氏と、高校の後輩でもある細川顕司が伝統を継承することや、ものづくりについて語りました。

革新が受け継がれて、伝統になる。

細川　毎田さんは工房の三代目ですが、伝統を継承する事は苦労も多いのではないですか。

毎田　伝統とは昔のものをそのまま繋げていくということではなくて、感性や時代性だったりを重ねて、新しいものをつくる事だと思うんです。だから祖父の頃からの特色を出しながら、いかに自分らしいカラーを出すかということが難しい部分です。

細川　伝統は、先代から受け継いできたものを、一子相伝にして守っていくイメージでした。

毎田　新しいものをつくるには、必ず何かを捨てなければいけないんです。ただ本質を捨ててしまったら見向きもされなくなるので、加賀友禅の本質は何だろうと最初の十年は悩みました。そして新しいことをやりはじめた時に初めて本質が分かった感じがします。

細川　僕も二代目でして、常に新しく変えていきたいと思っています。ただ父の頃から地域にあった家を建てるということがありまして、その点は大事にしていきたいと思っています。それが「金沢に生きる家」という住宅コンセプトで、私たちの家づくりの本質かもしれません。

ほそ川建設
代表取締役　細川 顕司

1978年金沢市生まれ。大学卒業後に(株)大林組に入社。2008年にほそ川建設に入社し、2015年から代表取締役社長に。

加賀友禅作家　毎田 仁嗣

1974年生まれ。1998年に父である毎田染画工芸 代目・毎田健治氏に師事。加賀友禅を生かした空間装飾にも取り組む。

ハレを祝う装いと、もてなしの空間。

毎田　友禅は人生の大切なハレの日に着る着物なので、お客様のご要望にどう答えるかがプレッシャーであり、楽しみでもあります。オーダーメイドという点では家づくりも同じですね。

細川　そうですね。昔の家はハレとケを意識して作られていました。ハレというのはお客様を迎える玄関や客間で、豪華に作っていました。逆にケは日常生活をする居間や台所です。

毎田　私たちにとってハレはセレモニーであり、誰かの大切な日にどういう装いをするかを考えることだと思うんです。住宅の場合も自分が住む家だけど、客人のことまで考えて作られていたんですね。

細川　今はライフスタイルも変わり、古民家のような間取りはなくなってきているんですが、昔の家づくりの考えを大切にしたいと思っています。だから、玄関とか床の間をきれいに作りたいと思っていまして、デザインには気を配っています。

手間を惜しまず、無二の逸品をつくる。

細川　作り手の気持ちが入っているものは、値段と関係なくお客様に欲しいと思ってもらえると思うんです。だから、品質を大切にしたいと考えています。

毎田　本当にそう思います。金沢は工房の規模や、市場は小さいですけど、一品ものの高級品をつくることができるんです。だから他では絶対にできないようなディテールまで手を加えることが大事だと思います。

細川　加賀友禅もお客さんに対する一品ものですけど、住宅も住む人に対しての一品ものであるので、住まう人の想いを叶えられるような住まいを作っていきたいと思います。